様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２８００２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１６７４

研究課題名（和文）臨床看護職者のDV被害女性への対応に関する教育的介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Nursing practice and evaluation about the screening for female intimate partner violence patients and the correspondence of the patients

研究代表者
井上　松代（Inoue, Matsuyo）

沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・准教授

研究者番号：３０３２６５０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　医療者のDVに関する認識を高める研修会を医療機関で開催した。研修会の内容は、DVの基礎知識、分担研究者らが開発した「DV被害者発見尺度(以下DS-IPV)」の説明等であった。その教育的介入効果は「臨床看護職者のDV 被害女性患者への対応認識尺度（RS-FIPVP）」を得点化して評価した。多くの対象者は、研修会前よりも研修会後に得点が上がり満点に近づいた。研修会は、総合病院３（136名）、クリニック１（18名）で実施した。2施設で、DS-IPVを用いたDVスクリーニングを開始した。
RS-FIPVPの有効性・有用性は確認され、研修会実施は看護職者のDV対応実践能力向上につながった。

研究成果の概要（英文）：The researchers held a workshop to improve the recognition about the DV of the medical person in some medical institutions. The contents of the workshop were basic knowledge about the DV and explanation about "the detection scales for intimate partner violence" (DS-IPV), etc.. The educational intervention effect was evaluated by the score of "the Recognition Scale for Female Intimate Partner Violence Patients" (RS-FIPVP) . The score of the workshop participants became higher, and it got closer to a perfect score. The workshop was conducted in three general hospitals (participants:136) and a clinic (participants:18). A DV screening was started by using the DS-IPV in two institutions.
The efficacy and usability of the scale were confirmed. The nurse practice ability for corresponding to a DV victim was improved by participating in the workshop.

研究分野：女性の健康

キーワード：DV被害女性　看護職者　DVの認識　スクリーニング

１．研究開始当初の背景

世界的に、ドメスティック・バイオレンス（以下 DV） による被害者の多くは女性であり、その女性および一緒にいる子どもへの深刻な心身の健康被害は公衆衛生上大きな問題とされている。DV 被害女性の健康問題に関する調査は様々な国で行われ、外傷、慢性痛、消化器系疾患や STD を含む婦人科系疾患、うつ病、PTSD の被害が多く、とくに多くの研究から DV は妊婦の 3-13%で発生し、母子への有害な結果に関連していた(Campbell JC, THE LANCET 2002.)。

米国は、早くから先進的に DV 対策に取り組んできたが、医療機関での DV 被害女性発見のためのスクリーニング実施率は、7%（女性 4821 人対象中 479 人）と低いことや(Ruth Klap et al., Society of General Internal Medicine 2007.)、医師も看護師も DV スクリーニングに関する専門的トレーニングを受けていない者が 6 割だった(Beynon et al., BMC Public Health 2012.)ことから、DV スクリーニングは確実な実施に至っていない現状である。

日本では、2010 年内閣府の第 3 次男女共同参画基本計画に、女性に対するあらゆる暴力の根絶を目指す中で被害者の保護に関する具体的施策として、医療関係者に対し、日常業務の中で被害者の早期発見への取り組みの推進と、研修の実施を促進することを挙げているが、全国的に臨床現場でこれらの施策は普及していない現状がある。

平成 24-26 年度科学研究費（基盤研究（C））により、研究代表者らが行った臨床看護職者対象(n=1855)の調査結果で DV に関する学習経験がない者が 59.7%を占め、直接 DV 被害女性に対応した経験がある者は 26.3%、患者本人からの訴えで DV 被害者だと知ったのが DV 被害の発見方法で最も多く 65.7%であった（新城、井上 公衆衛生学会 2013）。研究代表者らが開発した「臨床看護職者の DV 被害女性患者への対応認識尺度(以下 RS-FIPVP)」から得られた結果において、臨床看護職者は DV 被害女性患者の特徴である、様々な健康被害（例えば、便秘や下痢の消化器症状が多いなど）についての認識が低いことが明らかとなった。自由記述については、「言葉をどうかけたら患者本人が嫌がらずに、現状を話してくれるのかが分からず、DV に関する情報を聞き出すのにためらいがあります。」のように具体的な“対応方法を知りたい”や“マニュアルや事例集がほしい”という意見が多く、臨床看護職者のニーズがあることがわかった（井上、新城 フォレンジック看護学会 2014）。

このような経緯から、DV に関する知識と DV 被害の発見と対応のための実践力を同時に身につけられる研修会の企画と実施が効果的な教育になり得ると推察された。また、臨床看護職者が、「IPV 被害者発見尺度(以下、DS-IPV)」（22 項目：分担研究者の新城らが開発した、IPV：親密なパートナーからの暴力であり DV と同様)を用いて、女性患者の DV 被害スクリーニング実施や被害者への対応など、事例を通して学ぶことが実践力向上につながるものと考える。このスクリーニングの実施と DV 被害者の発見から支援までの看護職者の体験や学びを事例集やマニュアルにまとめることで、他の病院にも普及し易くなり、DV 被害の「発見の目」と適切に対応して専門機関へつなぐ「役割認識」をもった看護職者を早急に病院の中に増やすことができると推察される。

２．研究の目的

本研究は、DV 被害女性の早期発見のために医療機関の問診票等で、暴力被害の情報を医療者が患者から得られる体制作りと被害者への適切な対応への実践力向上、支援体制の基盤確立を目指して平成 24 年度から研究を推進してきた。

平成 24-26 年度科学研究費により研究代表者らが開発した「RS-FIPVP 尺度」の有効性および有用性を検証することが本研究の目的である。

具体的には、看護職者や医療者を対象に教育的介入（DV に関する知識の提供と DV 被害女性の事例紹介、研究分担者らが開発した DS-IPV 尺度の紹介とその利用法の説明）と、「RS-FIPVP 尺度」を用いて研修会受講者の DV の認識度評価を行う。さらに介入施設で、「DS-IPV 尺度」を用いて患者への DV スクリーニングを進めて、看護職者の DV 対応実践応力の向上を目指す。DV の研修会と看護職者の DV 被害女性への対応経験に関する事例を集め、事例集作成に取り組む。

３．研究の方法

1) DV被害女性への看護経験に関する事例収集のための調査

対象：臨床看護職者

方法：無記名自記式質問紙調査および留め置き法

【調査手順】

- 本調査は、研究代表者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施する。
- 研究責任者らが4施設の管理者への調査依頼と本研究の趣旨を説明する。
- 研究責任者らは、参加協力の得られた施設で、IPV被害女性患者への対応経験の多い部署（産婦人科、救急センター、内科、外科）の管理者（師長等）に調査参加への依頼文書と調査案内リーフレット を配布して調査の趣旨と参加者を募る方法を説明する。
- その後、各部署の管理者（師長等）に調査対象者（DV被害女性患者への対応経験がある者）への質問票の配布・回収を依頼する。

・質問票には「調査への参加協力依頼」および個別封筒をつけて配布し、回収は、各部署内に設置した鍵付き回収箱に記入後の質問票を封で閉じた個別封筒を入れてもらう。
・代表研究者らが各施設に出向き、各部署の回収箱を直接回収する。

【調査内容】
・調査内容は、属性（年齢、臨床経験年数）、RS-FIPVP（20項目）、病院でのDV被害女性の早期発見に対する必要性への考え、事例紹介、実際に行った看護、対応したときの気持ち、対応で困ったこと、対応で工夫したこと、DV被害女性の発見・対応に関する要望。

【分析】
・統計ソフトＳＰＳＳを用いて分析する。
・自由記述について整理する。

2) DVに関する研修会開催による教育的介入で、臨床看護職者および他の医療者のDV被害女性への対応認識をRS-FIPVPの尺度を用いて評価する質問紙調査
対象：臨床看護職者およびその他の医療者
方法：無記名自記式質問紙調査

【調査手順】
・本調査は、研究代表者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を得て実施する。
・研究責任者らが対象施設の管理者への調査依頼と本研究の趣旨を説明する。
・研究責任者らは、参加協力の得られた施設の看護部と研修会の企画をする。
・研修会開催時の開始前に受付で研修会資料と一緒に調査協力依頼、質問票を受講者（対象者）へ配布する。各質問票には封ができる個別封筒をつけておく。
・質問票の回収は、研修会終了時に各自で記入後の質問票を個別封筒に入れて封をした状態で、回収箱に入れてもらう。（研修会場出口に回収箱を設置しておく）。回収箱に提出された質問票を回収箱ごと研究者がその日のうちに回収する。
・研修会は各施設の会議室や講堂で行う。同じ質問票を使用し、配布・回収も同様に実施する。
・無記名自記式質問紙調査は、研修会の開始時と終了時に行い、属性以外の質問項目（全く同じ質問）に2回回答してもらう。

①研修会の内容（90分）
・DVに関する基礎知識（暴力の種類・頻度・サイクル、健康被害、関係法規、関連機関との連携等）
・これまでに開発されているIPV被害女性発見のためのスクリーニング尺度の紹介
・DV被害女性の家庭を想像するロールプレイ
・スクリーニング尺度を用いた問診と被害発見時の具体的対応（環境・声かけ等）の紹介
・DV スクリーニングについて、DS-IPV の尺度を用いた事例紹介と活用方法の説明
（・DV看護経験の事例収集の調査実施施設における研修会の場合、研修会開催前に、事例収集の調査を行い、その結果を研修会で報告する。）

②質問紙調査（研修会前後で自記式質問紙調査の実施）
・調査内容は、属性（所属部署、年齢、性別、臨床経験年数）、RS-FIPVP（20 項目）、IPV 被害女性患者への対応経験、病院での被害女性の早期発見に対する必要性への考え。

【分析】
・統計ソフトＳＰＳＳを用いて分析する。
・研修会前後のRS-FIPVP尺度20項目(5件法)を得点化し、得点比較を行う。
・平均得点の比較（t 検定等）

４．研究成果
1) DV 被害女性への看護経験に関する事例収集のための調査

・対象施設は、総合病院（公立2、大学１）、クリニック(産科１)
・調査票配布及び回収：160 部配布し、127部回収(回収率 79.4%)で、有効回答数 48部(有効回答率37.8%)であり、分析対象とした。

〔質問紙調査結果：収集した事例〕
・DV 被害女性の看護について、対応部署は産婦人科17件(35.4%)、救急センター14件(29.2%)、外科系(外来・病棟)6 件(12.5%)の順で多かった。
・発見方法では、本人の訴え23件(47.9%)、問診や観察した医療者からのアプローチ13件(27.1%)、事前の情報(カルテや文書から)8件(16.7%)の順で多かった。
・女性とあわせて子どもの被害は 5 件(10.4%)であった。
・対応時に臨床看護職者に影響したことは、感情への影響（怒り、驚き、悲しみ、辛さ）9 件(18.8%)、対応の難しさ（気づけない、声かけられない、タイミング）7件(14.6%)、被害女性の気持ち（なぜ被害を否定するのか、なぜ別れないのか）の理解の難しさ 6件(12.5%)、困惑（どうにかしたいがどうしたらいいのか、何か聞かれたらどうしよう）6件(12.5%)の順に多かった。

1)の DV 被害女性への看護経験に関する事例収集のための調査から、救急センターや産婦人科、外科系診療科の事例が多く、対応時に看護職者は、看護職者が抱く重たい感情、

助けたいがどうしたらいいのかという戸惑い、被害女性の気持ちが理解できない状況と声かけ等の対応の難しさを抱えていることが明らかとなった。

2) DV に関する研修会開催による教育的介入で、臨床看護職者および他の医療者の DV 被害女性への対応認識を RS-FIPVP の尺度を用いて評価する質問紙調査

・対象施設は、総合病院（公立１、法人 2)、クリニック(産科１)で、このうち事例収集調査の対象 2 施設を含む。
・研修会受講者は、総合病院 136 名、クリニック 18 名の計 154 名であった。そのうち調査票の回収は、総合病院 120 部、クリニック 12 部の計 132 部(回収率 85.7%)で、そのうち有効回答数は、総合病院 78 部、クリニック 9 部で計 87 部(有効回答率 65.9%)であった。有効回答数 87 部を分析対象とした。

〔質問紙調査結果：教育的介入の評価〕
・対象の属性について　人（%）
職種：看護師 28(32.2)、事務 16(18.4)、助産師 9(10.3)、医師 8(9.2)、その他 8(9.2)、不明 8(9.2)、MSW 7(8.0)など
性別：女性 51(58.6)、男性 28(32.2)、不明 8(9.2)
年齢：20 代 7(8.0)、30 代 15(17.2)、40 代 25(28.7)、50 代 27(31.0)、60 代 5(5.7)、不明 8(9.2)
DV 被害女性への対応経験
あり 31(35.6)、なし 44(50.6)、覚えていない 2(2.3)、不明 10(11.5)

・教育的介入の評価：
①RS-FIPVP の得点
対象 87 名全体の平均合計得点の変化
研修会前：85.8(SD9.6)
研修会後：96.0(SD7.4)　P<0.001
研修会後に有意に得点が増加（＋10 点）

②職種別 RS-FIPVP 平均合計得点

	〔研修会前〕	〔研修会後〕
助産師	92.1(SD6.6)	97.7(SD4.7)
医師	90.1(SD6.9)	96.8(SD6.9)
MSW	88.6(SD10.7)	93.3(SD12.8)
看護師	85.8(SD10.1)	96.5(SD7.9)
検査・技師・薬剤師	82.0(SD8.0)	99.0(SD1.7)
事務	80.9(SD7.2)	94.8(SD6.8)

・すべての職種が、研修会後には 90 点台に得点が高くなり、満点の 100 点に近づいた。とくに事務職の研修会前後の得点差が 14 点と最も大きく、看護職者向けの研修内容を正しく理解できたことが推察された。

③問診票への DV スクリーニング項目の必要性(研修会後)
とても必要 40(46.0)、まあ必要 23(26.4)、少し必要 7(8.0)、必要ない 2(2.3)、わからない 4(4.6)、不明 11(12.6)
・「少し必要」～「とても必要」までの必要性を認識しているのは 8 割を占めた。

④研修内容の理解
理解できた 51(58.6)、まあ理解できた 23(26.4)、不明 13(14.9)
・研修会受講者の 85%（「理解できた」～「まあ理解できた」）は、研修内容を理解できていた。

⑤DV 被害女性への看護経験事例収集調査結果を当該施設の研修会で報告した 2 施設からの意見の一例
・「これだけ症例があることを知って私の看護師としての立場で、何を知っておくべきで、何をする必要があるのかが分かった。（DV 被害女性の看護経験の無い看護師）」と身近なことと捉えていた。

⑥研修会後の成果
・研修会を開催した施設(4 施設)のうち 2 施設(総合病院 1、クリニック１)は、DS-IPV の尺度を用いたスクリーニングを開始した。

2)の DV に関する研修会開催による教育的介入では、すべての職種で DV に関する認識が高まり、研修会後には、DV スクリーニングの必要性を理解して、DS-IPV によるスクリーニングを開始した施設もあった。

RS-FIPVP の有効性・有用性は確認され、研修会実施は看護職者の DV 対応実践能力向上につながった。
今後、DV スクリーニングを実践し始めた施設での取り組みについて、スクリーニングの負担感や改善点、DV 被害女性を発見したときの具体的な対応や被害女性の状況等、看護職者が実践した内容を把握することが課題である。さらに、「スクリーニング・DV 被害女性への対応実践・評価」の一連の流れをまとめ、当該研究にて集めた DV 被害女性への看護実践の事例とあわせて、事例集の作成を行う。そのため、本研究を継続し、医療者が DV 被害女性患者に適切に対応できる専門的な教育方法の構築と DS-IPV によるスクリーニングおよび評価・連携ができる看護職者を増やすためのシステム作り(院内・院外の支援機関含む)への発展に取り組んでいく。（平成 30-32 年度 基盤研究(C) 課題名：DV 被害女性患者のスクリーニングおよび対応についての看護実践とその評価）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）

Matsuyo Inoue, Miyoko Uza, Masaki Shinjo, Itsuko Akamine, Development of a clinical nurses recognition scale for female intimate partner violence patients, Japan Journal of Nursing Science, (2016) 13. 437-450.

〔学会発表〕（計　3 件）

1)井上松代、新城正紀、赤嶺伊都子
DV に関する認識を高める医療者のための研修会開催と DV の認識度評価 第 76 回日本公衆衛生学会総会(鹿児島 2017 年 11 月)抄録集 Vol.64 No.10

2）新城正紀、井上松代、赤嶺伊都子
IPV 被害女性の特徴および発見方法-典型的な一事例からの考察- 第 76 回日本公衆衛生学会総会(鹿児島 2017 年 11 月)抄録集 Vol.64 No.10

3）新城正紀、井上松代、赤嶺伊都子
IPV 被害者発見尺度(DS-IPV)を用いた被害者発見および被害者支援 第 75 回日本公衆衛生学会総会(大阪 2016 年 10 月)抄録集 Vol.63 No.10

６．研究組織

(1)研究代表者
井上 松代（INOUE, Matsuyo）
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・准教授
研究者番号：30326508

(2)研究分担者
新城 正紀（SHINJO, Masaki）
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・教授
研究者番号：50244314

(3)研究分担者
赤嶺 伊都子（AKAMINE, Itsuko）
沖縄県立看護大学・保健看護学研究科・准教授
研究者番号：60316221

(4)研究協力者
友田 尋子（TOMODA, Hiroko）
甲南女子大学　看護リハビリテーション学部看護学科　教授

加藤 尚美(KATO, Naomi)
湘南医療大学　保健医療学部看護学科教授